

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

7.文化資源研究センター

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2014-03-19 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5055

7 文化資源研究センター

文化資源研究センターの設置目的

文化資源研究センター（英語名 Research Center for Cultural Resources）は、文化資源の体系的な管理と情報化、およびその共同利用や社会還元に向けて調査や研究開発をおこなうとともに、実際に事業を推進する際の企画・調整をおこなうことを目的として、2004年4月に設置された。

文化資源には、人間の文化にかかわるさまざまな有形のモノやそれについての情報のほか、身体化された知識・技法・ノウハウ、制度化された人的・組織的ネットワークや知的財産など、社会での活用が可能な資源とみなされるものが広く含まれる。こうした文化資源を人類共有の財産とすることで、グローバル化する世界で人びとが異なる文化への理解を深め、互いに共生していくための基盤を作り出そうというのが、文化資源研究センターのめざすところである。文化資源研究センターは、独自に研究事業を企画・運営するほか、文化資源関連事業として、館内、館外の研究者が参画して実施する多様な文化資源プロジェクト等の企画・調整を通して、文化資源の運用全般に寄与することを役割としている。

文化資源研究センターの研究事業

2012年度に文化資源研究センターが独自に実施した研究事業の概要は以下のとおりである。

- ・多田敏捷氏が昭和50年代から収集した、大阪府指定民俗文化財である玩具コレクション（約6万点）を大阪府から受け入れ、データベースの整理作業の準備を進めた。
- ・当館で運用している標本資料情報管理システム（I. B. Museum）について、検索結果におけるシステム外部の画像の表示方法及び検索条件入力画面におけるデフォルトの検索条件の設定方法に関する機能修正・追加を行い、標本資料情報管理の根幹となる本システムの使用方法を改善した。
- ・視覚障がい者のために作られている触地図をタッチセンサー付きディスプレイで五感化することで多様な人が情報を得やすい館内案内を開発することを目的に、プロトタイプとして一次試作を開発し、その試作のディスプレイに表示される情報を変更したプログラムを作成し二次試作とした。一次試作について5人の視覚障がい者に被験者として使用してもらい評価を得た。

文化資源関連事業

文化資源に関する主な開発研究や事業は、文化資源関連事業として運営される。そのねらいは、目的、計画、経費、責任を明確にし、それぞれの成果を的確に評価して、さらなるプロジェクトの発展を図ることにある。文化資源関連事業は、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」からなり、文化資源運営会議が毎年募集し、選定する。

また、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」は館内外の研究者の運営のもとで遂行されるが、文化資源研究センターや情報管理施設の専門スタッフの支援・協力を受けて、効率的かつ機動的に推進されている。

2012年度の文化資源関連事業の概要は以下のとおりである。

1. 運営体制

1) 文化資源関連事業の体制整備

2009年度から再編を実施した文化資源関連事業について、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」の3種類のカテゴリーによって運用した。また、文化資源共同研究員の制度を運用し、共同利用体制を推進した。さらに外部有識者による意見をプロジェクトの審査に反映させた。

2) 本館展示新構築の体制整備

本館展示総括チーム及び各展示プロジェクトチームのリーダー等からなる拡大展示専門部会を開催し、新構築を円滑に進めた。

2012年度新構築分（日本の文化「祭りと芸能」「日々の暮らし」展示）について、実施設計に続いて展示施工を行い、完成させた。また、2013年度新構築分（日本の文化「沖縄」「多民族社会」展示、朝鮮半島の文化展示及び中国地域の文化展示）の基本設計を完成させた。さらに、2014年度及び2015年度新構築分の設計者を選定した。

2. 文化資源プロジェクト

文化資源プロジェクトは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の第2期中期目標・中期計画に沿って、本館の大学共同利用機関法人としての共同利用基盤を整備するとともに、本館あるいは関連する他機関が所有する学術資源の体系化を進め、共同利用を促進し、学術的価値を高めるための研究プロジェクトである。

プロジェクトは、5つの分野（調査・収集、資料管理、情報化、展示、社会連携）に関わる研究開発、または研究成果の前記5分野への展開を目的とするもので、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元ができるものであることを前提とする。

1) 調査・収集分野

- ・「朝鮮半島の文化」展示の新構築に向けて、朝鮮半島の近代化が進んだ植民地期の文化に関する標本資料を収集した。
- ・「朝鮮半島の文化」展示の新構築に向けて、韓国とカナダとアメリカ合衆国にて、現代韓国社会をめぐるトランスナショナルリズムに関する標本資料を収集した。韓国にて、移民指南書123冊と国家試験対策書籍22冊、現代のトランスナショナルな状況を物語る生活財29点を購入した。カナダでは、同様の生活財5点を購入した。米国では、同様の生活財2点の寄贈を受けた。
- ・「中国地域の文化」展示の新構築に向けて、漢族の祖先祭祀、居住様式の映像取材及び祖先位牌、文房四宝、茶器の資料収集を、福建省廈門、泉州、石獅、晉江、永定で行った。さらに、上海、瀋陽と北京で婚礼用品、山水画、景德鎮の磁器などを収集した。
- ・ロシア、モンゴル、中国にまたがって居住する、トゥルク系言語をはなすトゥバ人について、みずからトゥバ人である研究者を聞き手として、映像取材をおこなった。
- ・2015年度実施予定の「アイヌの文化」展示の新構築に向けて、展示替え用の魚皮製衣服1着を完成させた。また、2011年度に撮影した映像の編集と研究用・研修用番組の作成を行った。
- ・2011年度実施の「徳之島の民俗芸能の映像取材」で撮影した「夏目踊」を伝える徳之島町井之川集落の景観・史跡などの現況と、同集落在住の郷土研究家・町田進氏の語りを取材した映像をもとに、井之川集落の映像による地域誌として番組を作成した。
- ・滋賀県長浜市において曳山祭の映像取材を実施し、それをもとに、「日本の文化」展示場内で観覧に供する映像番組を作成した。
- ・「日本の文化」展示新構築で使用する芸能・祭関係資料の収集・製作、及び、2011年度に収集したつくりものの展示場での組立・設置を行った。
- ・日本の文化「多民族社会」展示の新構築に向けて、近畿、関東を中心とする在日華僑、コリアン、ブラジル人の日常用品、宗教儀礼関連、教育、衣類、生業関連等の標本資料を収集した。
- ・「中国地域の文化」展示の新構築に向けて、歴史的に華僑華人を多数送りだしてきた僑郷と呼ばれる地域（主に南部沿海）を中心に標本資料の収集を行った。
- ・2007年度にフィリピン・ミンダナオ島で収集した映像音響資料をもとに、マラナオ文化を紹介する長編番組（英語版およびマラナオ語版）を、マラナオ民族音楽学者であるウソパイ・カダー氏と共同で製作した。
- ・クリントン（南フィリピンを代表するゴング音楽）の名手マイモナ・カダー氏の演奏の映像記録を整理・編集し、研究・学習用の番組を制作した。幅広い利用を促進するため、日本語、英語、マラナオ語の番組を製作した。
- ・2008年度に製作したビデオテーク番組『バレンシアの聖母マリア誕生祭と管楽器ドゥルサイナ』の英語版、スペイン語版を、アメリカ合衆国の民族音楽学者であるロベルト・ガルフィアス教授（民博外国人研究員）と共同で製作した。
- ・台湾原住民族の現代の工芸作家ならびに工房において製作している工芸品の収集を行い、現代における先住民工芸の様相を調査、研究するための基礎資料として民博に収蔵した。本資料は「中国地域の文化」展示の新構築において活用する。
- ・2011年度の映像音響資料取材プロジェクト（「インド・ラージャスターン州における社会変容と婚礼」）の成果に基づき、取材資料を長・短編の作品として編集製作した。
- ・中国雲南省大理市のペー族農村で取材した映像素材から、マルチメディア番組「中国雲南省ペー族の暮らしと文化」を完成させるためのコンテンツ、さらに内容を厳選した20分程度の短編番組4本を編集・製作した。
- ・1992年のモザンビーク内戦終結後、民間に大量に残された銃器を農具と交換することで回収し、その回収された銃器を用いてアートの作品を生み出すというプロジェクトが進められている。このプロジェクトによる作品4件と関連資料を収集した。

- ・サモアにおいても製作技術の継承者が数少なく、希少となっている「サモアのファインマット」の製作を依頼し、購入した。これにより、本館におけるオセアニアの物質文化と先住民運動に関する資料の充実化を図った。

2) 資料管理分野

- ・保存科学的見地からの資料管理活動、総合的有害生物管理（IPM）の考えに基づいた生物被害防除・殺虫対策に関わる研究開発、これらを企画・調整し、統括した。各種の博物館環境調査を実施し、得られた結果を総合的に分析し、検証することで、文化資源の体系的な管理につとめた。収蔵庫の収納状態調査と、資料の保管・収納改善を、計画的に進めた。
- ・国立民族学博物館、岩手県陸前高田市旧生小小学校、新潟県村上市奥三面歴史交流館重要有形民俗文化財奥三面の山村用具収蔵庫の環境調査を実施し、被災した民俗資料の仮収蔵として廃校を利用した場合の保管環境の創出方法について明らかにし、廃校利用の際に必要な改修プランを策定した。

3) 情報化分野

- ・ズニ博物館館長が2009年7月に来館し、31点のズニ資料の熟覧調査を実施した。本プロジェクトでは、ズニ博物館長が記録に残した資料情報をデータベースに書き加え、さらに日本語で記されているその他の管理情報を英訳する作業を行った。
- ・民博に収蔵されている身装（身体と装い）関係資料のうち、成形されていない布地標本（例：サリー、腰布）の素材、文様デザイン、染織技法等を中心に、フィールドで得られた写真と連動しながら、地域（民族の居住地域等の区分に基づく8地域）毎にデータベース化を行った。さらには、民博標本資料データベースと、身装文献データベースとのリンクを実現させた。
- ・2010年度に「オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真データベース」として館員公開したデータベース（8,019件）にキャプション情報を追加し充実を図った。
- ・民族建築デジタルアーカイブは、世界の民族建築（地域社会で完成されたいわゆる伝統的な住宅様式のこと）を記録し、その情報を三次元CGを利用して図像化、インターネット上に公開してゆこうというプロジェクトであり、ユニークな木造建築の宝庫であるオーストロネシア語族（インドネシア、ベトナム）を中心に三次元CG化をおこなった。2009年度、2011年度、2012年度の3年間で、あわせて30民族49棟（一部未完成）の建物の三次元CGを作製し、これらのデータを公開するためのデータベース化をおこなった。
- ・京都大学を拠点として組織された学術調査隊による記録写真のうち、京都大学アフリカ類人猿学術調査隊、京都大学アフリカ学術調査隊、の写真資料11,663点について、各撮影者または、著作権継承者のとの間で著作権全面譲渡の覚書の締結処理を進めたうえ、民博のデータベース検索システムにより館内公開した。更に、京都大学探検部トンガ王国学術探検隊資料の7,644点について、テキスト情報を付加した。

4) 展示分野

- ・特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」

協賛	財団法人千里文化財団
主催	国立民族学博物館
協力	青森県立美術館、パナソニック汐留ミュージアム、株式会社青森スタジオ、株式会社商華堂、日本万国博覧会記念機構
後援	社団法人日本建築学会、社団法人日本建築家協会、社団法人全日本建築士会、日本生活学会、日本民俗建築学会
特別協力	工学院大学図書館
実行委員	館内 久保正敏（実行委員長）、朝倉敏夫、飯田 卓、小林繁樹、近藤雅樹、佐藤浩司 館外 岡本信也（野外活動研究会）、岡本靖子（野外活動研究会）、荻原正三（工学院大学名誉教授）、黒石いずみ（青山学院大学）、小山茂樹（ブックポケット代表）、高橋晴子（大阪樟蔭女子大学）、横川公子（武庫川女子大学）
開催期間	2012年4月26日～6月19日
入場者	26,893人

- ・特別展「世界の織機と織物 ——織って！みて！織りのカラクリ大発見」

主催	国立民族学博物館
協力	北海道大学植物園・博物館、北海道開拓記念館、ところ埋蔵文化財センター・どきどき、新潟県津南町歴史民俗資料館、群馬県沼田市教育委員会、織物参考館・紫、長野県大鹿村教育委員会、東京国立博物館、高田装束研究所、野外民族博物館リトルワールド、株式会社豊田自動織機、トヨタ自動車株式会社、トヨタテクノミュージアム産業技術記念館、株式会社西山産業、石川県立

白山ろく民俗資料館、大阪日本民芸館、香川県立ミュージアム、瀬戸内海歴史民俗資料館、株式会社美織、うるま市立石川歴史民俗資料館、沖縄県多良間村教育委員会、南風原町立南風原文化センター、株式会社今昔西村、新井淳一、石井香久子、上原美智子、沖山 道、日下部啓子、関駒三郎、鳥丸知子、財団法人千里文化財団

実行委員 館内 吉本 忍（実行委員長）、上羽陽子
館外 井関和代（大阪芸術大学）、内海涼子（大阪成蹊大学）、大野木啓人（京都造形芸術大学）、金谷美和（国立民族学博物館外来研究員）、ひろいのぶこ（京都市立芸術大学）、藤井健三（西陣織物館）、柳 悦州（沖縄県立芸術大学）

開催期間 2012年9月13日～11月27日

入場者 25,654人

・特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」

主催 国立民族学博物館

協賛 住友商事株式会社

特別協力 大英博物館

アンタナナリヴ大学芸術考古学博物館

協力 マダガスカル航空日本事務所、日本万国博覧会記念機構、財団法人千里文化財団

後援 アジア太平洋無形文化遺産研究センター、ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所、大阪府、吹田市、吹田市教育委員会、日本アフリカ学会

実行委員 館内 飯田 卓（実行委員長）、上羽陽子、大貫美佐子

館外 朝岡知子（朝岡工房代表）、佐藤優香（国立歴史民俗博物館）

開催期間 2013年3月14日～6月11日

入場者 34,762人

・2013年秋特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」の展示準備

実行委員 館内 近藤雅樹（実行委員長）、飯田 卓、太田心平、齋藤玲子、野林厚志

館外 井上 潤（渋沢史料館長）、内田幸彦（埼玉県立歴史と民俗の博物館）、齊藤 純（天理大学）、佐藤美弥（埼玉県立歴史と民俗の博物館）、佐野賢治（神奈川大学）、大明 敦（埼玉県立歴史と民俗の博物館）、武田晴人（東京大学）、宮本瑞夫（宮本記念財団理事長）

開催期間 2013年9月19日～12月3日

特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」の実行委員会を組織し、展示構成について議論し、展示と図録編集の準備を進めた。

・企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」

プロジェクトメンバー 館内 日高真吾（リーダー）、吉田憲司、林 勲男

館外 橋本裕之（盛岡大学）

開催期間 2012年9月27日～11月27日

・企画展（国際連携展示）「台湾平埔族の社会と文化」（仮題）の展示準備として、国立台湾歴史博物館の担当者とのメールならびに面談を通して検討を重ね、展示資料についての選定、展示基本設計を完了した。本展示会の共催を正式に決定した。

・その他

・2012年度は、2008年度から開始された本館展示新構築の第5年次にあたり、本年度は、日本の文化「祭りと芸能」「日々のくらし」展示を新たに構築し、2013年3月に一般公開した。

・中央・北アジア展示新構築に向けて、2012年11月22日に文化資源共同研究員を招集して打ち合わせを行った。昨年度決めた基本方針を確認するとともに、展示場を見ながら、展示の基本構造を話し合い、それに基づいて必要な資料の種類を割り出し、来年度の資料購入計画を策定した。

・ホームページから公開しているビデオテークデータベースのうち、「メニューで選ぶ」方のユーザインタフェースを、展示場に設置しているビデオテーク端末のものと同様の画面構成を持ち、ほぼ同様の振る舞いを行うものに更新した。

・多機能端末室に導入すべき新型ビデオテークの機能およびコンテンツについて検討するため、専門家の意見を聞くと共に、新しいコンテンツの試みとして、特別展や企画展等の記録映像のマルチメディアコンテンツ化を進め、公開に向けて問題点の整理を行った。

・ビデオテークを対象にし、次世代の検索方法の充実を図り、ユーザ（来館者だけでなく研究者）のニーズに即

した形で、映像検索の方法の課題を検討した上で、検索システムの方向性を提案し、プロトタイプの開発を行った。

- ・他機関での携帯端末の活用事例の調査や、既存のコンテンツを用いたプロトタイプの開発実験等を通して、次世代のみんぱく電子ガイドに求められる要件について検討した。
- ・2010年度および2011年度に行われた、アメリカ展示及びヨーロッパ展示の新構築に対応するため、みんぱく電子ガイドのコンテンツ（日本語版、英語版、中国語版、韓国語版）を製作した。2012年10月に日本語版を、2013年3月にその他の言語のバージョンを公開した。コンテンツ数は、アメリカが27本、ヨーロッパが12本となる。

5) 社会連携分野

- ・2002年度に制作した「みんぱく」の「ソウルスタイル」を基礎として、その10年後の改訂版「ソウルスタイル」を2バック製作した。また、新しいテーマによる韓国のバック「ソウルのこども時間」も2バック製作した。
- ・2012年8月7日に、博学連携教員研修ワークショップ2012 in みんぱく「学校と博物館でつくる国際理解教育——新しい学びをデザインする」を開催した。参加者は主に小・中・高等学校、支援学校等の教育機関教諭、大学生、大学院生など計83人であった。
- ・2012年11月29日に、社団法人北海道アイヌ協会胆振地区支部連合会の協力を受けて、カムイノミ及び重要無形民俗文化財「アイヌ古式舞踊」演舞を公開により実施した。

3. 文化資源計画事業

「文化資源計画事業」は、研究成果を普及することを目的とした事業で、2つの分野（資料関連、展示・社会連携）に分けられる。

1) 資料関連分野

- ・3年計画の3年次として、本館「朝鮮半島の文化」に関する映像資料収集の新たなシステムを構築するため、韓国国立民俗博物館との交流協定に基づき協議を行い、延世大学、西江大学、漢陽大学で映像人類学を専攻する学生に研修を受けさせて作品を制作した。
- ・オーストラリア・アボリジニ研究の日本における先導的な役割を果たした小山修三名誉教授が、1980年から20年間に渡りアボリジニ社会の大きな変化を撮影してきたフィールド写真（8048コマ）の寄贈を受け入れた。
- ・2011年度に開発した支援ツールを用いて、継続して標本資料データベースのクリーニングと公開作業を軌道に乗せるとともに、補助的なツールを開発した。また、標本資料受入から、情報化、データベース公開に至るプロセス全体を見渡し課題を明らかにした。
- ・2012年3月に民博で実施した研究公演『ホピの踊りと音楽』のために民博で制作し使用した米国先住民ホピの儀礼用衣装の一部について、制作者全員から利用許諾を取得し、標本資料として寄贈を受け入れた。
- ・オマーン・イエメンの銀製の装身具、装飾品など162点の寄贈を受入れた。
- ・スタンフォード大学名誉教授別府春海氏から、同氏が現地で購入したアラスカ先住民アルーティックの仮面の寄贈の申し出があり、寄贈を受け入れた。
- ・植村直己資料のうち、1973年グリーンランド横断時に植村氏が使用した、キャンプ用品、テント、カメラなど100点を標本資料として追加登録した。
- ・マオリの芸能・カバハカに関する資料7点の寄贈を受け入れた。
- ・「日本の文化」展示の新構築のなかで、「日々の暮らし」セクション「町の暮らし」において展示するために、「大黒様像、大黒様型貯金箱」の寄贈を受け入れた。なお、本資料は寄贈者のお宅が商売をされていた時期に店先に置かれていたものである。
- ・「日本の文化」展示の新構築の協力者である川島秀一氏を通して、川島氏ご自身がフィールド調査をおこなっている地域の漁師より「大漁旗」の寄贈を受け入れ、「日本の文化」展示の新構築のなかの「日々の暮らし」セクション「海の暮らし」にて展示した。
- ・「日本の文化」展示の新構築のなかで、「日々の暮らし」セクション「山の暮らし」において展示するために、「焼畑関連資料」の寄贈を受け入れた。
- ・「日本の文化」展示の新構築のなかで、「日々の暮らし」セクション「里の暮らし」において展示するために、「奥谷家所蔵の稲作資料」の寄贈を受け入れた。なお、本資料は寄贈者の奥谷氏が主に1980年代に使用していた稲作農具である。
- ・「日本の文化」展示の新構築のなかで、「日々の暮らし」セクション「里の暮らし」において展示するために、「生駒市所蔵の稲作資料」が寄託され、受け入れた。なお、本資料は生駒市教育委員会が長年収集してきた生駒の稲作農具である。

- ・「時代玩具コレクション」は大阪府立大型児童館ビッグバンが所蔵していたもので、大阪府指定民俗文化財である。玩具コレクターとして著名の多田利捷氏が収集されたものであり、江戸時代から平成にかけての玩具コレクションである。大阪府立大型児童館ビッグバンが運営方針を変更するに伴って、コレクションの散逸を防ぐために当館で寄贈を受け入れた。
 - ・東南アジアの音楽芸能についての理解を深めるための資料として、ミャンマーの楽器サウン・ガウック1台および人形芝居ヨウテ・プエーに用いられる人形4体の寄贈を受け入れた。
 - ・京都大学学術調査隊関連写真資料の追加分として、写真資料計4,447コマの寄贈を受け入れた。これにより、同学術調査隊の残した写真資料を十全な形で本館に所蔵することができるようになった。
- 2) 展示・社会連携分野
- ・本館所蔵のアフリカンビーズを神奈川県立近代美術館・葉山に貸し出して共催展示を開催した。
 - ・民博で行われている各種研究活動ならびに展示の内容を、来館者を中心とした一般利用者に、より効果的、効率的に理解してもらうと同時に、一般利用者からの様々な意見や情報を民博内にフィードバックさせることを目的としたワークショップならびにワークシートの開発を実施した。
 - ・国立民族学博物館におけるボランティア活動者の受入要項に基づき、登録したボランティア団体であるMMP（みんぱくミュージアムパートナーズ）および地球おはなし村の活動支援を行った。
 - ・2010年度に新構築したオセアニア展示場において、オープニング後に実施したアンケート調査を踏まえ検討・精査したうえで展示内容を充実させた。
 - ・2010年度に新構築したアメリカ展示場において、オープニング後に実施したアンケート調査及び外部研究者からの学術的見地を踏まえ検討・精査したうえで掲示の充実及び安全性の向上を図った。
 - ・韓国国立民俗博物館で2012年度に開催された「アラン展」の世界巡回展示の一環として本館において2013年5月から企画展（国際連携展示）を開催するための準備作業を行った。
 - ・2003年に本館にて開催した特別展「マンダラ チベット・ネパールの仏たち」を石川県立歴史博物館にて巡回展として開催した。
- 3) その他
- ・2013年の干支である「へび」に関する資料を民博の所蔵資料の中から選び、本館展示場内「ナビひろば」に展示し、へびにまつわる文化の紹介・解説を行った。合わせて、展示活動研修会の研修生が撮影した写真パネルを「探究ひろば」横の休憩所に展示した。
4. 情報管理施設のプロジェクト的な業務
- 「情報管理施設のプロジェクト的な業務」は、情報管理施設が実施する、文化資源に関する研究支援業務である。
- ・みんぱくの貸出先での紛失や破損、および老朽化した資料の交換・補修を行った。
 - ・第3収蔵庫1層・2層の寄託資料約800点の配架見直し及び再配架作業を行った。
 - ・ヨーロッパ展示の撤去資料260点の点検・クリーニング・再配架作業を行った。
 - ・資料点検の際に破損・汚損などの異常が確認された標本資料に補修・保存処理を施した。また、「日本の文化」展示資料9点の補修を行った。
 - ・主に未撮影の標本資料3,740点の写真撮影及び測定を行った。
 - ・民博製作の研究用映像資料から6点を選定し、みんぱく映像民族誌第6集～第9集として4枚のDVDにまとめ、解説シートやジャケットを作成した。これを800セット分複製し、627か所の図書館や研究機関等に寄贈した。
 - ・日本コロムビアから寄贈された金属原盤（約7,600枚）の現物そのものには資料番号が記入されておらず、さらに、その中の約800枚は重複分として扱われ、資料番号も振られていない。この業務ではこれらを適切に管理するため、現物と、研究者による調査結果を記録したデータベースとを照合すると共に、現物に資料番号札を挿入し、番号を記入するための準備を行った。
 - ・2010年度末に行ったフォトCDの媒体変換の残り、48,307コマについて、写真データを、汎用性があり長期保存が可能と考えられる画像ファイルの形式に変換した。
 - ・2010年度に寄贈受入れや購入したSP・LPレコードに、汚れがひどかったりカビが発生したりしているものがあつたため、これをクリーニングするとともに、保存性を考慮した収納包材に収めた。処理した枚数は、LPが174枚、SPが21枚である。